

周知のように、ラジオ・テレビ教育は50年代に教育の舞台に登場した。60年代以後、電子工業と情報技術の飛躍的な発展により、視聴覚教育機器の刷新が急速に進んだ。国内外の多年にわたる教育実験の検証を通じ、近代的な手段を用いての教育の実施に何ら問題のないことが証明された。しかし教育学の面から見るならば、とうてい完全なものとはいえないものであり、この点については、近年来国外で論議がなされている。伝統的な教育論を持つ保守派は、視聴覚教育を「真正なる文化の第一の敵」とみなしたが、進歩派はそれを教育中のすべての問題を解決する「妙薬」であり、万能であるとみなした。我々はいえ、ラジオ・テレビ教育の優秀性は認めねばならないという立場に立ち、それが現代社会における教学手段面での必然的発展方向を示すものであることを見据えつつ、しかもその限界をも認識しておくべきだと考えるものである。とりわけラジオ、テレビから知識情報が伝えられても、受講生が即座にそれを学びとり理解できるわけではないということは認識しておかなければならない。伝達から修得までの間には隔たりがあるのであって、多方面からの大量の工作を待って、初めて教育目的が達成されるのである。ラジオ・テレビ教育用の雑誌を創刊し、教学を補助するのは、この大量の工作の一部に過ぎないが、重要なプロセスなのである。

1979年に『遼寧電大通訊』を創刊した際、我々は以上の基本原理をすこしも認識していなかった。ただ伝統的方式にのっとって、雑誌にテレビ教育に関する方針、政策及び運営経験、電大の動向といった原稿を載せることを主としていた。事実「経験の交流、状況の精通」とを本誌の大目標として掲げていた。しかし省ランクの電大であるから、経営規模には限りがあり、上記のような内容の雑誌では対象とする読者も教学班

を運営する教学単位と各教学班の少数の指導者、事務担当者に限られてしまう。そのうえ経験も「常に目新しいものがある」わけではない。電大の草創期には学校運営等に関する新鮮な経験もあるが、そのままではお定まりの根本的な経験が繰返し持ち出され、読者も段々雑誌に実際的な意義がないと感じるようになっていこう。それに圧倒的多数を占める学生達は皆、我々が電大生向けに、彼等の学習を助け、彼等の学業のレベルを高める原稿を主に載せるよう求めていた。我々編集部はこれら末端の学習者達の声に基づき、教師学生を対象に何度も調査研究を行った結果、最後に次のような結論を出した。「省ランクのテレビ教育用雑誌は教学と密接に関連づけられ、遠距離教学の重要なメディアとなり、教育の質の向上に務めるべきである」と。本誌はこの指導理念に基づき、当時理工科学生のすべてが学習に骨が折れると感じていた科目無機化学を窓口として試行を開始することにした。ところがこの補助教育という窓口が開かれるや、たちまち良好な成果があがったのである。当時の鉄嶺地区等の地市電大教師学生はこう意見を寄せている。「無機化学の雑誌教育は我々の試験合格率を大いに上昇させた…」と。

『遼寧電大通訊』第一期は2,000冊を発行したが、第二期は12,000冊に急増した。教育需要に応えるため、本誌は1979年下半期より、計画的に英語、高等数学、物理等基礎科目の主任教師に原稿を依頼し、彼等に教育上の要求に基づき、不足を補うことを目的とした文章の執筆を求め、雑誌による補助とテレビによる授業とが同時に進行し、テレビ授業において、時間、内容、電大生のみならずすべての人々が視聴する可能性があることに伴って生ずる自己規制等による不足を補えるよう配慮した。

『遼寧電大通訊』が載せた教学の状況とマッチした原稿は、つぎつぎに

し読みし、全員が物理のポイント、難解点を把握し、視野を広め、視点をかえ、応用力を身につけるのに役立つものと認め、借り出して一同で手分して書き写した。ところが返却時に閲覧室の係員が、本をばらばらにしたのでもう館外貸出しをしないと申し渡した。そこでこの電大の学生達は編集部に新しい本を一冊、区の閲覧室に弁償するために提供してもらえないか、と手紙で依頼してきたというわけである。

こうした客観的な効果に基づき、我々は1982年入学生を対象として、普通物理の放送前に、全学期にわたる思考練習問題200題余を載せ、全学期にわたる思考練習の手引としてみた。これは形式が目新しく、生き生きとして柔軟生があり、基礎理論と基本知識を明らかにしたばかりでなく、学生の考え方を啓発する力に富むうえ、実験あり、理論あり、図解あり、挙例、内容共に豊富なものであった。それゆえ学生は日常学習に時間を割くようになり、期末になって試験範囲を聞くなどということがないようにしむけられた。この「思考練習問題と例解」は刊行後電大の教師、学生に歓迎されたばかりでなく、一般の大学の学生にまで争って学習するものが出るほどであった。

我々の雑誌の「特集」編集者はしばしば教学班にゆき、座談会を開くとともに、読者の投書の中から学生の主任教師の授業に対する意見を拾い集め、まとめて各科の主任教師に報告する。すると主任教師（或は他の執筆者）がこれに適確に答える。こうして主任教師はいつでも編集部あての投書の中から自分のテレビ授業の不備な点を把握し、それにマッチした文章を執筆し、不足をカバーするのである。このような適確かつ時宜を得た情報交換とフィード・バックは、客観的にみて、教師と学生間の一方は教え、一方は学ぶという場面にあってかけ橋の役割を果た

し、近代的な遠距離教育の情報伝達網を構成し、テレビ教育の質の向上を促したと言えよう。

テレビ大学は82年に文科語文類を実施したが、分散した開校形式に加えて、開校後間もないことと経費の不足とから、多くの教学班運営単位がいまだに図書資料を持っていない状況にある。文科の学生が授業以外に教学内容と関連する図書資料を読めないならば、必ずや知識の幅広い獲得に影響が出よう。電大の文科雑誌とて多種にわたる参考資料を大量に提供することはできない。しかし科目に密接に関連する専門テーマの文章を何本か載せることで、読者の視界を広め、知識を増加させたことは疑問の余地が無い。

テレビ教育用雑誌は教育を補助する一方で、教育と密接に関係をもつ活動を実施することもできる。1981年夏、北京、上海、遼寧の三電大の編集部門は、「十省、市、自治区ラジオ・テレビ大学学生数学コンテスト」を開催した。各省、市は品性・学業ともに優れた代表を選出し、「計算の正確さを競い、思考力の鋭さを比べあった。」テレビ大学には英才が集まっている。各種のコンテストを開く活動は、人材を発見、養成、選抜する良い方法の一つであり、基礎知識を確固たるものにし、智力を発展させ、基礎科目を学ぶ積極性と自覚とを高めるのに大いに役立った。経験が、基礎科目に優秀な学生達が、後日大成するための基礎をこれで固めたこと証明した。今年本省が東北工学院に合格させた三名の大学院生の中、その当時の数学コンテストの代表が含まれていたのである。テレビ教育雑誌編集部は、あくまでも「民間」としての心構えを持ち、遠距離教育に有益な活動を実施している。各種コンテスト、コンクール、夏のキャンプ、教師学生懇談会などは電大の教師と学生を結び

付け、分散している学生達に一体感と電大生であることの誉りを抱かせ、抜きん出た人材を養成し、学習のレベルを不断に高めていく格好な方法なのである。

電大の遠距離教育補助用雑誌は、雑誌と読者、作者の間の「ネット・ワーク」を打ち立てなければならない。『電大理工』は、1982年末、全国の各ランクの電大組織を対象として、連絡網をその末端の教学班にのばした。このことは、状況を把握し、電大生の学習に関する要求を雑誌の編集者にフィード・バックし、編集計画や実際の割付を決める時のヒントを提供するうえで、大いなる役割を果たした。半年間の経験を経て、これが大変効率のよい「ネット・ワーク」だということが証明されたのである。

### 三、電大雑誌はテキストと輔導用 テキストの重要な補充材料で ある

電大の雑誌もまた一種の印刷教材であるが、テキストやセットになった輔導用テキストとは異なった点がある。それはテキストが必ず備えねばならない系統性と一貫性とが必要とされない点である。電大雑誌は学生の学習の実態に基づき、教育の質を向上させることと密接に係わっているなら、必要とされる内容をスタイルに拘りなく載せうるフレキシブルな教育材料なのである。雑誌がテキストと異なる点は、それがすばやく情報を届ける手段だという点にもある。一つのテキストを編纂するには最低一、二年はかかるが、雑誌は伝達せねばならない知識情報を一、

二ヶ月のうちに知らせることができる。それゆえ迅速かつ適切な時期に、学生が学習中に会った難解点を解決してやることができ、教学上での不足点を補充できる。レベルの面では柔軟性を基本原則に、一般的には中等レベルの学生にあわせつつ、同時に一定量の啓示性に富んだハイ・レベルの原稿を組み入れることにより、電大の優秀な学生を育て、彼らの視野を広め、彼らの学力水準を高め、先進学生を養成することもできる。

執筆者はいくらでも見つけることができる。科目のポイント、要求を最も良く把握している主任教師に執筆依頼することもできるし、テキストを熟知しているテキストの編集者、専門知識について造詣の深い教授、専門家、学生の実情をよく知っている電大教師に執筆を依頼することもできるし、更には疑問点を提起する能力を持った電大生に原稿を書かせることもできる。内容は主に基礎科目の教育補助材料であるが、一般性の強い専門基礎科目へ応用がきくよう配慮することもできる。同時に、学生に対して道德教育を進める機能を発揮させることも可能である。例えばすばらしい状勢、党の電大教育に対する方針と政策の宣伝、電大の成果、電大の動向等の宣伝といった具合である。また雑誌であるから、各号の重点を時に応じて調整し、変更することができる。例えば客観的な事物の発展に基づき、時に応じてコラムを設けたり廃止したりすることもできる。それはテキストの補充であり、教師の講義を補助するものであり、学生が随意に読む課外読み物でもある。遠距離教学の雑誌はプランニングを通して教育的意義を十分に持たせ、おごそかで美しい表紙と学習生活をありのままに反映する図版、写真、漫画、詩歌をおりこむことによって、学生に対して教育を行うこともできる。ある意味

では、雑誌は出版物の統体であり、知識を伝えると同時に読者に美を享受させるものすらあるのである。

#### 四、電大雑誌は遠距離教育の中で 前途洋洋たる未来をもっている

共産主義思想を伝え、科学文化に関する知識を伝える出版物は、社会主義制度を整備し発展させ、理想、道徳心、知識をそなえ、規律正しい社会主義のニュー・フェイスを養成することに対し、極めて大きな力を持っている。出版事業の繁栄と発展は、社会主義精神文明を建設する重要な要素であるばかりでなく、物質文明の建設に係わる基幹部分であり、重要な条件でもある。鄧小平同志は「ただ論議していても近代化は実現しない。知識があり、人材があつてこそ．．．．」と指摘している。出版物の質と量は国家の政治、経済、文化教育と科学技術の発達状況を如実に反映している。1980年度の統計によれば、イギリスは年間48,000種を出版し、アメリカは43,000種、日本は37,000種を出版している。しかるに我国は10億の人口を抱える大国でありながら、毎年わずか21,000種を出版するに過ぎず、出版までに要する時間も長い。

我国のラジオ・テレビ大学は、農民が多数を占め、経済文化の遅れた発展途上国の一つに誕生したものである。しかし我国の特徴は、党の指導のもと、国の上下を挙げ齊心努力し、富国強兵を目指し、高度な物質文明と精神文明を建設し、短期間に世界の先進国の水準に到達しようと決意していることにある。このような10億の人口をもった社会主義国家から見れば、テレビ大学は学校であるばかりでなく「戦場」でもあるの

であって、それ自体多くの規格と多くのランク、多くの方式を持った教育システムといえるのである。

我国のラジオ・テレビ大学はまさに草創期にあり、開設されるコースは毎年広がり、募集人数も日を追って増加している。現在のところ遼寧電大だけでも在校生40,000人余り、自学視聴者12,000人余りにのぼるうえ、84年には機械、電気、土木建築、化学、管理工学等を募集し、さらに省独自で開設する党政幹部専修科も募集する予定である。上記各コースの募集総数に大学外で全科或は単科を視聴している者を加えれば、全国では数十万人から百万人に達するであろう。もし86年までに我国が放送衛星を打ち上げ、中央、省、市、県のラジオ・テレビを流している四ランクのすべてをカバーすることが出来るなら、我国のラジオ・テレビ教育は近い将来、広大な農村に広がってゆくことであろう。テレビ教育の発展に伴ない、教育を補助する雑誌もそれに応じて発展をせねばならない。現在のようにわずか数校の電大のみが雑誌を公開発行している状況では、テレビ教育事業の発展が必要とするものを満たしきれない。現在各省には万単位の電大生がいるが、これはすなわち、各省電大の長所と特徴とに基づき、異なった科目に異なった形式を採用した、複数の電大による独自のコースごとの雑誌創刊の必要性の存在を意味している。基礎科目の方面では『電大英語』『電大物理』『電大化学』『電大数学』等の雑誌が、専門コース方面では『機械』『電子』『建築』『化工』が、経済方面では『工業企業管理』『商業管理』『工業会計統計』『商業会計』『金融財政』などがあげられよう。電大生の思想面については『電大徳育』が創刊され、学生の思想教育のために、生き生きとした教育内容が提供されるべきである。当然のことながら、各種の同内容



の雑誌は独自の風格及び高い水準を打ち出すことに勉め、その選択については学生達の自由にゆだねるべきである。なぜなら雑誌は規定された必読教材ではなく、学生の経済的負担を増加させてはならないからである。我々はこう考える。電大のシステムないで、大衆が求め、かつその水準を保証できるような雑誌を刊行し、それを数十万から百万にのぼる電大の科目視聴者の選択に供し、互いに妍を競わせることは、なんとも好ましいことであり、ラジオ・テレビ教育を普及・向上させ、教育事業の発展を促すとともに、ラジオ・テレビ教育の質を高めるという最終目的の達成を促進する作用があると。

ラジオ、テレビ大学は創設以来わずか四年余りをへたのみであり、我国の教育史から見てもほんの一瞬のことにすぎないが、その発展ぶりはめざましく、規模も雄大で、教育史の上でも十分目を見張らせるものがあり、やがて輝かしい一頁を記すものとなるであろう。時とともに、遠距離教育の大発展期が到来しようとしている。我々は電大雑誌という教育メディアをいかに運用してゆくかという研究を積極的に展開すべきであり、電大雑誌の質の向上に積極的に取り組まねばならない。